

## 孤児院の ヴィヴァルディ

アントニオ・ヴィヴァルディ(1678—1741)の『四季』、特にその中の《春》が日本で一番有名なクラシック音楽のひとつであることは間違いないだろう。しかし、実はこの曲が知られるようになったのは、たかだか50年前のことである。それまで、ヴィヴァルディなんて名前は、本場ヨーロッパにおいてさえ、ごく一部の音楽学者を除けば誰も知らなかった。ベートーヴェンもワーグナーも、この曲を聴いたことがなかったはずである。

ヴィヴァルディは、バッハと同じ時代のスターだった。バッハは生涯をドイツ国内で過ごしたが、イタリアから送られてくるヴィヴァルディの楽譜を研究し参考にした。当時のヨーロッパ音楽の最先端だったからだ。しかし、死後は立場が逆転した。バッハが偉大と称賛されるようになった一方、ヴィヴァルディは忘れられてしまったのだ。

彼が活躍した町は、運河で名高いヴェネツィア(ヴェニス)。女子孤児院で音楽を教えたり、曲を作ったりしていた。どうして立派な作曲家ともあろうものが、孤児院で働いていたのか。現代の私たちには場違いにも感じられるが、ちゃんと理由はあった。

ヴェネツィアは、東方貿易の拠点として栄えた港町である。港町には必ず船員御用達のいかがわしい界隈があるもので、アムステルダムやハンブルクの飾り窓、いわゆる赤線地帯は観光名所にもなっているほどだ。ヴェネツィアでも、無事陸に上がった男たちは解放感いっぱい酒を飲み、けんかをし、女を買った。彼らが束の間の快楽にふけた結果、父親が誰だかわからない子供が数多く生まれることになった。つい先頃日本では「赤ちゃんポスト」なるものが問題になったが、ヨーロッパの場合、育



てるつもりのない親は、赤ん坊を教会の入口に捨てることが多い。ヴェネツィアの娼婦たちもその慣習に倣った。

お金持ちの寄付によっていくつもの孤児院が作られ、子供に職業教育を施した。音楽もそのひとつ。ヴィヴァルディがいた施設は、特に演奏の水準が高いことで知られていた。その評判はイタリア中、それどころか外国にまで伝わっていて、多くの貴人が孤児たちの演奏を聴くためにやってきたほどだ。富が集まり、豪華な邸宅の中で悦楽の生活が営まれていたヴェネツィア。街角で漏れ聞こえる美しい音楽。その音楽を奏でてヴェネツィアの美に貢献していたのは、身寄りのない乙女たちだった。

《春》はのびやかで明るい、気持ちのよい音楽だ。そして春は、誰彼関係なく、あらゆる人間のところにやってくる。もちろん、親に捨てられた子供のところにも。厳しい環境にいたであろう孤児たちは、《春》を弾きながら、何を考えたのだろう。

### プロフィール

許 光俊(きよ・みつとし)

1965年東京生まれ。評論家、慶應義塾大学教授。著書に『クラシックを聴け!』『コンヴィチューネー、オペラを超えるオペラ』(以上青弓社)、『世界最高の日本文学』『世界最高のクラシック』(以上光文社新書)などがある。